

特別でない特別支援教育

— 学習障害・ディスレクシア当事者と考える、 これからの特別支援教育と合理的配慮について —

座長：中井昭夫（子どもの睡眠と発達医療センター 副センター長）

神経発達障害のうち、学習障害は医療よりも教育での関わりが大変重要です。近年の脳科学研究では、学習障害の中核である発達性ディスレクシアにおいて特徴的な神経基盤が示される一方、その子にあった教育を行った場合、神経回路の再構築が起こることがわかっています。学習とは、その人が生きていく歴史・文化・社会の中でよりよく生きていくために「脳が環境からの外部刺激に適応し、自ら情報処理神経回路網を構築する過程」であり、教育とは「環境からの刺激を制御・補完して学習を導き鼓舞する過程」（JST/RISTEX 脳科学と社会）とすれば、神経発達障害は先天的な脳機能の障害であるということにもはや意味はないとも言えるかもしれません。脳の多様性、多重知能という考え方に立ち、ディスレクシアの子どもたちが自らの豊かな才能を最大限に開花させ（最適化）、社会参加に繋げることが私達に望まれています。

一方、これまでの教育や支援は当事者の本当の困り感や思い、要望に沿ったものであったのでしょうか？ 改正発達障害者支援法における「個別的教育支援、指導計画の作成の推進」や障害者差別解消法における合理的配慮のために、これからどのような支援・教育が必要でしょうか？

当事者の視点に立った、科学的エビデンスに基づく特別支援教育は、決して「特別」なものではなく、すべての子どもにも有効なはずです。

本シンポジウムでは、まず、ディスレクシア当事者として多くの生き辛さを乗り越え、啓発のための講演含め様々な活動を精力的に行っている美んちゃんが、ドキュメンタリー映画「DXな日々」を通じての当事者の思いを含め、自らの得意分野を知り、活かすことの大切さをユーモア交えて熱く語ってくれました。

高校生のあーちゃんからは感覚の問題含めて自分の「しんどさ」について、悲しかった扱い、嬉しかった支援、「当事者の声を聴いて、勝手に決めつけないで、一緒に解決してほしい！」と勇気をもった登壇に会場からは、「感動した!」「涙が止まらなかった!」などの感想もたくさんいただきました。

河野先生からは合理的配慮としてICT（情報通信技術）やAAC（Augmentative and Alternative Communication 補助・代替コミュニケーション）などを用いて、「最適化」を行うこと根拠や支援の実際についてご紹介していただきました。更に、地元、浜松の支援者からもご発言をいただくことができました。

限られた時間ではありましたが、ちょうど Dyslexia Awareness Week 2016 の期間に開催された本シンポジウムは参加者の方にも、また日本子ども学会にとっても大変意義のあるものとなったのではないかと考えています。

話題提供者

「当事者が語る学校、家庭での困り感とホントの合理的配慮について」

砂長美ん（美んちゃん：成人当事者）

「ひとりの当事者としての体験と思い」

あーちゃん（高校生当事者）

「ICT を活用した読み書き支援」

河野俊寛（金沢星稷大学 人間科学部教授）